

クアラルンプール大司教表敬訪問記

綱島（三宅）郁子（マラヤ大学大学院）

2001年8月13日（月）の午後4時50分頃、インド系女性秘書 Franciska Savarimuthu さんの誘導で、私は Bukit Nanasにあるクアラルンプール大司教オフィスの応接室に座っていた。10分後には Anthony Soter Fernandez, D.D.大司教との面会が予定されている。カトリック信者ではない私が場違いにもここにいるのは、過去を遡ること2000年3月からの「カトリック・プロトコールの約束」を、遅ればせながら果たすためであった。

不必要な誤解を避けるために、私事で恐縮ではあるが、背景を略述させていただく。私の専攻分野は社会言語学で、マレーシアとの関わりは、国際交流基金派遣による1990年4月の赴任当時から今日に至るまで、あくまでもことばの問題が中心である。しかし個人的に、クアラルンプールに滞在していた計4年間、英語を使用するメソヂスト教会を中心に、都合のつく限りプロテスタント系の礼拝にも出席していた。この経験が、結局のところ、現在の「マレーシアのキリスト教における言語問題」のテーマへと結びつく機縁となったわけである。

キリスト教に関しては、幼少時に（自己選択の余地なしに）カトリック教育を受けたことがきっかけで、好き嫌いの感情を別として、学部2年になってから本格的に聖書を読み始めた。プロテスタントで使用する66巻の聖書

を選択したのは、聖書学はプロテスタントの方が進んでいるという事情ゆえである。従って、カトリック・オーソドックス・プロテスタントの相互協力をめざすエキュメニカル運動は、私にとって全く望ましい傾向なのである。本来、言語問題だけが調査の焦点ではあるものの、ひとたびキリスト教会という領域を対象とするならば、必然的に付随するこの件に関して調査者は立場を明確にしておかなければならないと思われる。

マラヤ大学の今の指導教官は二人目であるが、幸運なことに、大学評議会によって指名されたのは、社会言語学専門のインド系カトリック女性だった。非常に勤勉で精力的な先生で、密かに苦戦していた私のテーマを殊のほか喜んでくださり、「カトリックの方が、プロテスタントよりも組織化が進んでいて歴史も長いし、信者の私としてもわかりやすいから、カトリック教会を対象にしてはどうかしら」と勧めてくださった。いささか遠回りになったが、冒頭の大司教表敬訪問の原因は、そもそもこのマヤ先生が作ったといえなくもない。

先生は、「教会はすべての人に開かれているのだし、あなたは日本人に見えない（？）から、ミサに自由に出席しながら、黙って参与観察をすればいいのよ。いちいち上位聖職者に許可を求める必要はありません」とこともなげにおっしゃった。マラヤ大学の指導教

官しかもカトリック信者の先生がこうおっしゃるのだから、と大船に乗ったような気分になり、私は嬉々として首都圏下の20のカトリック教会をまわり始めた。ところがどっこい、事はそんなに単純ではないと気づくのに、時間はかからなかった。まず、プロテスタントとカトリックの違いから、礼拝すなわちミサで何が実際に行なわれているかを人に聞かなければわからないことがたくさんあった。日本のミサにも何度か出席したことがあるが、マレーシアと日本とでは、同じカトリックでも典礼のやり方が異なるのである。第一、仮に私が日本人には見えないとしても、新来者だということは、常連の教会の人々にはお見通しであり、もてなし上手のマレーシア人のこと、あれやこれやと尋ねながら、こちらの身元を確認しようとする。「リサーチ」だというと、途端に誰もが緊張した面持ちになるのは、マレーシア社会の複雑な事情に少しでも触れたことのある方であれば、充分想像できよう。指導教官も、それについてはもちろん言及され、「マラヤ大学博士課程在籍中の者で、教会の言語使用について調べているところです、と自己紹介しなさい」と指示されていた。もっとも、ミサ直後の人々は一般的に柔軟な心持ちになっていることもあり、私の方でもプロテスタント教会に行っていた者だと正直に言ったので、特に咎められることはなかった。むしろ、「あなたとは初めて会ったような気がしないわ」「今度ここに来たら、修道院に泊まりなさいね」などと好意的に受けとめてくださった。だが、各教会の歴史背景

や人口分布について知るために、司祭か教会所属秘書と直接あるいは電話で話すことになると、事情は異なった。ここがカトリックのプラス面でもあり、内外からの誤解あるいは批判の対象にもなるところなのだが、ヒエラルキーがしっかりしているために、結局、大司教と司教まで話が筒抜けになっていたのである。もちろん、理解ある司祭や教会奉仕者の方達は、黙って見守ってくださっていた。そして、言うまでもなく私の方でも、名刺と調査協力をお願いするマラヤ大学からの公式書簡を持参の上、何らやましいことなく公明正大に行動していたつもりである。どうやらマヤ先生は、「わからないことは神父さまか秘書に伺いなさい」と私に指示したことが、すなわちカトリックのヒエラルキー階段を上ることに結びつくとは、どういうわけか想像だにされていなかったらしい。ある日突然、私は、上述の大司教秘書から電話で「カトリックのやり方では、まず大学からの公式書簡を持って、大司教の許可を得てからリサーチを始めるものです。日程を調整して、早く表敬訪問に来てください」と厳しい口調で言われた。驚いて、早速先生に相談すると、「聞かなかったことにしなさい」と言う。そんなことでは資料も手に入らないし、これからのデータ収集にも差し支えるから、と懇願の末、結局しぶしぶ承諾していただく形で、大司教事務所に伺うことにした。

私としては、国語であるマレー（シア）語をカトリック教会で使用する際の事情経過を可能な限り正確に知っておきたかった。過去

の新聞報道などをマイクロフィルムで後追いしても、どこか曖昧だからである。(この件については、非常にデリケートかつ根深い心理的問題を伴うため、いずれ稿を改めて後日ご紹介する。) 初対面の場合、誰もが公式見解すなわち建前を教えてくれるので、雰囲気は実になごやかである。すなわち、「プロテスタントは教派によってバラバラだけれど、カトリックの場合、国語ミサもあるし、マレー(シア)語を教会内で使用することは、全く問題ない」と、どの教会でも異口同音に語るのがある。ところが、いったん帰国して資料やデータを整理していくと、どうも腑に落ちない点が出てくる。それで、教えられたメールアドレスで連絡を取り、再度話を聞きたいと申し出ると、人にもよるが、最初に会った時とは様相がいささか違って来るのである。もちろん、本音と建前の葛藤の問題はいかなる調査にもつきものとはいえ、カトリックの場合、バチカンの勅令にいかに従うか、すなわち大司教の指示と教会にどれほど忠実であるかが、ひいては個人としてのカトリック信仰のバロメータにもなり得るため、外国人の非カトリック信者に矛盾をつかれた場合、窮地に追い込まれることにもなりかねない。

カトリック共同体内でも、大司教に対する思いはなかなか複雑なものらしい。「大司教がこうおっしゃったから」という話になると、司教も含めたほとんどの人々が(場所が遠く離れているにも関わらず) 小声になることから、それは察せられる。単に高位聖職者に対する礼節とヒエラルキー上の問題のみ

ならず、同じインド系カトリックであってもマラヤラムの現大司教(前大司教はスリランカ系)と、タミルの司教以下その他の人々とは、当然、さまざまな差違からくる摩擦が起こるだろうことは充分想像がつく。大司教の側でもそれは察知済みなのであろう。話が前後するが、面会の間、去年の大聖年にバチカンに赴かれた時の話になった時、突然「本当に偶然にも」と声を高ぶらせ「教皇ヨハネ・パウロ二世のお傍にひざまずく恵みを私はいただいたのだよ」と、謁見姿の写真を一枚手渡してくださった。それは、使徒ペトロの後継者である(とカトリックでは信じられている)教皇を崇拝する心情に溢れているばかりでない。「凡て労する者、重荷を負ふ者、われに來れ、われ汝らを休ません」(マタイ伝 11章 28節)を文字どおり実践するかのような、日頃の心労をすべて委ねきった安堵の表情が映し出されたものであった。その写真から、イスラーム文化圏しかも複雑な多民族・多言語・多宗教社会にあるカトリック・クアラルンプール大司教という立場が、いかに「上からの任命」であるとはいえ、実に孤独極まりないストレス続きの仕事であるかが、カトリック信者ではない私にも充分察せられたのである。

さて、5時ちょうどに現れた大司教は、まずにこやかに握手を求め、実におだやかな話し方をされる方であった。それまで私は、法衣姿の写真しか拝見したことがなかったので、こげ茶色の地味なシャツという質素な服装の大司教にまずびっくりした。応接室とって

も、6畳ほどの広さの実に簡素な部屋である。

「まあまあ、気を楽しみなさい。ここにはタタミもあるし…」とおっしゃるので、ふと床を見ると、なんとゴザのようなものが敷かれていた。秘書がするのかと思っていたら、片隅に置かれていたティーセットで、大司教自ら私のためにお茶を入れてくださったのにも、全く恐縮してしまった。

自己紹介とリサーチ目的については、既に大学の公式書簡と共に手紙で伝えてあったので、話題は専ら、人物テスト(?)を兼ねた多岐にわたる質問であった。特に核心をつく部分になると、聞き方を変えて同じ質問を繰り返されるのには、こちらの一貫性を試されているようで閉口した。また、恐らくこれは全世界に広がるカトリック教会の強みでもあろう、共通の話題をという配慮からか、4年前から大阪在住の私に「今の大阪司教はどなたでしたかね」と聞かれた時には、日本でもカトリック雑誌を定期購読し、京都のカトリック書房で買い求めた何冊かの本を読んで、それなりの予習をしておいたつもりだったが、まるでお手上げであった。ただ、去年のクリスマス直前に撮った、自宅に最も近い高山右近ゆかりの高槻カトリック教会の写真を数枚用意しておいたため、なんとか場は保てたのではないと思う。1980年代半ばに2回、東京と仙台を訪問されたことがあり、故相馬司教のことをよく覚えていらっしゃるという。日本のカトリック系学校との交流プログラムもあるとのことであったが、その具体的な成果については触れられなかった。

11年前から付き合いのある華人プロテスタントやインド系カトリックの友人達は、私を安心させようと「まあ、お忙しい方だから、5分程度の顔合わせで、お茶も出ないと思うよ」などと言ってくれたのだが、実際のところ、差しでたっぷり30分という結果には、驚いた。(それだけでなく、その後ひょっこり現れた司教との面談も30分続いたのである。) 普段使わない気を使ったせいか、2週間以上たった今でも、緊張の余韻が残っている。日頃の精進不足がこういう時に難を招くとも言おうか。

この大司教が長年にわたって取り組まれている社会的事業の一つに、国内治安法 (ISA) の廃止運動がある。もちろん、人道的見解を前面に打ち出してはいるものの、多数のクリスチャン達が検挙・逮捕・投獄された1987年10月11月の‘Operasi Lalang’騒動がその背景にあることはいままでのない。いつ頃、解決の見通しがつくのかは定かではないが、是非とも在位中に達成していただきたい要件である。そのためには、我々外国人も、単なる好奇心から無責任な情報を流したり振り回されたりしないよう、心して協力するよう要請されているのかもしれない。

(2001年8月31日マレーシア独立記念日に記す)